

「電車だ、わーい！」

内藤 真理子

きっかけは、OBペンの勉強会アフターの飲み会の時だった。会長がNさんに、悠遊に載っていた趣味の列車の話をしきりに聞いていた。

Nさんは、実家の庭に線路を敷いて、自分で作った豆列車を動かしているそうで、会長は実際に乗せてもらえることになったようだった。

そこで、近くに座っていた人全員が誘われた。私も偶々近くに座っていたのだ。ラッキー！

その日は快晴。総勢五名で押し掛けた。

玄関の出发点に、緑色の二台の牽引車と三台の客車が停っている。前庭の右側には手造りの十三cmの幅の銀色のレールが延びている。

早速、Nさんが一番前に乗り、残りの二台の客車にも二人が座った。

「出発！」ゆつくりと列車は動き出した。

運転手一人が乗るのだったら、牽引の列車は一台で良いそうだが、一度に三人も乗せて走るには、二台の動力が必要だそうだ。玄関前のプラットフォームからレールは左にカーブをしている。列車はスムーズに前進。足元のレールを見ると、引き込み線もあるが右にカーブをしている方に進む。しばらくは直進。スピードもさつきより出ている。やがて、建物に沿って右に行くと、そこにはレンガのトンネルが……。

真つ暗なトンネルを抜けると、隣の家との境の塀がある。そこも家に沿って右に曲がり、又、右に曲がると、出发点の玄関前に到着。

何と愉快的な旅だろう。すっかり童心に帰る。

♪ 運転手は君だ、車掌は僕だ、後の四人は電車のお客♪、なくんていう童謡では、せいぜい、縄跳びの紐を輪にして電車に見立てているのだろうが、こちとらは、Nさん手造りの本物のレールと電車なのだ。

運転もさせてもらった。引き込み線が何か所かあって、別ルートでも運転できる。気持ちが高揚する。三段切り替えのスピードボタンのトップに手が動く。スピードが上がる。あわててダウンする。

Nさん、この壮大なレール、トンネル、がっちりとした列車、客車等を造るのに、「十年以上かかっています」と、少年のような笑顔で話してくれた。